

住込みフィールドワークでテーマに出会う —ウズベキスタンの田舎暮らしとバザールの賑わい—

Finding Research Themes in Live-in Field Work: Country Life and the Hustle and Bustle of Bazaars in Uzbekistan

宗野 ふもと
SONO Fumoto

1. はじめに

2010年5月、私は、念願だった住込みフィールドワークを開始した。場所は、ウズベキスタン南部のカシュカダリヤ州チロクチ地区にあるとある集落である。集落に住むフドイクロフ・シャリフさんのご一家が、私を一年間受け入れてくれることになった¹。

私は、住込みフィールドワークでは、集落で生産される手織りの絨毯が、誰によってどのように生産され利用されているのかを調べようと思っていた²。絨毯に着目したのは、私は学部時代に美術史を専攻していたのだが、その時に手工芸に興味を持ったことがきっかけである。手工芸は美術品であると同時に、日々の暮らしの中で作られ使用される生活用品でもある。生活用品の機械による大量生産が一般的になると、手工芸の生活における重要性は低下した。それでも、手工芸はお土産や記念品として、また、一部の地域では現在でも生活必需品として価値を持ち生産されている。私は、住込みフィールドワークを通して、生活の変化と共に、手工芸の生産がいかに変化し維持されているのかを具体的に知りたいと思っていた。こうした問題意識があったので、大学院ではフィールドワークを重視する文化人類学や地域研究の勉強を始めた。そして、紆余曲折はあったが、何とか住込みフィールドワークをするところまでこぎつけたのだった。

私を受け入れてくれたシャリフ一家は、ウズベキスタンの観光都市サマルカンドとシャフリサブズを結ぶ道路沿いに住んでおり、彼らは1998年から観光客向けに絨毯を売っていた。家の敷地内には絨毯工房があり、その工房では近所の女性が賃金を貰いながら絨毯を織っていた。シャリフ一家以外の集落の多くの世帯では、観光客に絨毯を販売することは少なかったが、冬に糸を紡ぎ春に絨毯を織り、家庭で使用していた。シャリフ一家の絨毯ビジネスや集落における絨毯の生産状況は、私の関心と合致していた。私は、シャリフ一家に住み込んでフィールドワークを行

1 ウズベキスタンでの受け入れ機関、科学アカデミー歴史学研究所のアドハム・アシロフ先生に紹介していただいた。

2 フィールドワークを行うにあたり、指導教員の藤倉達郎先生や足立明先生からは、お手本となる民族誌を見つけること、お手本からフィールドワークのデザインや調査の方法を学ぶように、という教えを受けた。私が住込みフィールドワークをする際にお手本とした民族誌は、中谷（2003）である。

えることになり、とてもわくわくしていた。さらに、丘陵地帯にある集落の景観は美しく、シャリフさんの家も道路沿いの小さな丘の上にあったので、眺めは抜群によかった。このことも私の心を一層ときめかせた。



写真1：集落の景観（2010年）



写真2：絨毯工房の様子（2010年）

以下、本稿では、念願だった住込みフィールドワークがいかに展開したのかについて、①シャリフ一家の娘としてフィールドワークを行うことの難しさ、②試行錯誤をしながら進めた世帯調査、③予想外にすっからはまってしまったバザールでのフィールドワーク、④住込みフィールドワークを振り返って思うこと、の順に紹介していきたい。

II. 村の生活の現実

住込みフィールドワークを開始した時点で、私には、博士予備論文（修士論文相当）のために行った約4カ月のフィールドワークと、タシュケント国立東洋学大学への半年間の語学留学の、合計約10カ月にわたるウズベキスタン滞在経験があった。私にとって村落部での長期滞在は初めてだったが、ウズベキスタン各地でフィールドワークやホームステイの経験があったので、村の生活にはそれほど苦労せずなじめるだろうと考えていた。それに、シャリフ一家の人々が、私を非常に快く受け入れてくれたことも安心材料となっていた。特に、シャリフさんが、私のことを「日本から来た娘」と言ってくれたことは、とても心強いことだった。

ところが、住込みを始めてすぐに、方言、食べ物、インフラ状況、集落の人々の雰囲気などさまざまなことが、これまで私が経験してきた「ウズベキスタンの生活」や「ウズベキスタンの人々」とは異なることに気づいた³。中でも、フィールドワークを進めていく上で大きな壁になったの

3 方言について、ウズベク語には、大きく分けてカルルク方言（標準ウズベク語の基になったと言われる）、キプチャク方言、オグズ方言がある。集落周辺はキプチャク方言が話されていた。タシュケントでの語学留学では、標準ウズベク語やタシュケント方言に慣れ親しんだので、キプチャク方言の独特な発音や言い回しに

が、女性が明確な用事なしに一人で集落内を歩き回ることに対して集落の人々が抱く強い忌避感だった。ウズベキスタンでは、都市部においても、女性がむやみに外出するのは良いことではないとされる。しかし、集落における女性（特に未婚の女性）が外出することに対する忌避感は、都市部のそれよりも非常に強いと私には感じられた。女性の外出の多さは、家事をしないことや遊び好きと結びついており、外出好きな女性に対する評判は良いものではない。さらに、女性本人だけでなく家族の評判にも影響を及ぼす。私は、集落の基礎情報を得るために、全世帯を対象とした世帯調査をしようと考えていたが、一家の人々から一人で出歩くのは危ないと言われ、誰かに付き添ってもらわないと世帯調査に出かけられない状況に陥ってしまった。

世帯調査に付き合ってくれるのは、当時住込みお手伝いをしていた親戚のハフィザか、シャリフさんの息子イルハムの妻であるサルタナトだった。しかし、二人とも日中は掃除、洗濯、料理、牛の世話、絨毯を買いにやって来る観光客の相手で忙しく過ごしていた。「今日は世帯調査に付き合うから」と言ってくれても、彼女たちの仕事がひと段落する夕方まで待たされることもしばしばあった。「精力的に活動し、集落の人々と親交を深めていくフィールドワーカーの私」の像は早くも崩れ去った。日本では、夜中に一人で研究室から自宅へ戻ることもしばしばという、気ままな一人暮らしを謳歌していた私である。当然、進まない世帯調査に焦りを深め、また、そもそも外出がままならないことに対してフラストレーションを溜めた。しかし、私はこの状況をどうやって打開すればよいかまったくわからなかった。

私は、サルタナトとハフィザに「日本では、女性は自分が行きたいと思えばいつでもどこでも行けるものだ。なぜこの女性はそうしないのか?」という八つ当たりのような質問をしたことがある。彼女たちの返事はというと「ここでは『娘は成長するにつれて小さくなる (qiz bola katta bo'lgan sari kichkina bo'ladi.)』といわれているの」だった。女性は成人してもなお（成人すればなおさら）、一人立ちは不可能という意味である。私は、彼女たちの男女不平等（当時の私にはそのように思えた）を受け入れているような発言に対して、地域研究者の端くれとして「このような発言をするのには在地の論理があるはずだ。この点こそ私が明らかにしていくべきことなのではないのか」という思いと「なぜ彼女たちは声を上げないのか」という怒りの気持ちが同時にこみ上げた。

は非常に戸惑いを感じた。食べ物に関しては、人参、肉、米などを炊き込んだプロフが最も代表的なウズベク料理といわれ、客人には必ずといっていいほどプロフが振舞われる。一方で、集落周辺で客人に振舞うべき料理はショルヴァと呼ばれるスープであった。「もてなし料理＝お米が食べられる」と思い込んでいた私（日本人なので結局お米が食べたいのである）にとっては、米料理がなかなか食べられなくなったことは、地味にショックなことだった。インフラについて、私が住み込みをしていた2009～2010年は集落では停電している時間の方が長く、また、ガスと水道は未整備だった。ロウソクの光でフィールドノートを書いたことは良い思い出ではあるが（ロウソクの光は思ったより明るく優しいので、フィールドノートを書く時間はリラックスタイムでもあった）、インフラが未整備であることから生じる生活の不便さには苦労した一年だった。なお、2019年時点では、電気事情は大幅に改善されたようである（とはいえ時々停電は発生しているようだが）。集落の人々の意識について、人々は集落周辺のことを「荒野 (dasht)」と表現する。「荒野」は「村 (qishloq)」や「町 (shahar)」とは異なり「荒野」に住む人々の生活習慣は「村」や「町」の人々のそれとは異なるという意識を持っていた。

住込みフィールドワーク開始当初を振り返ると、集落の生活に慣れるのとにかく苦勞していたこと、外出が自由にできず世帯調査が遅々として進まない中で、私は悶々と日々を過ごしていたことが思い出される。このとき私は、調査地選びから調査のやり方まで根本的なことを間違えてしまったかもしれない、と感じていた。そして、この状態が続けば、調査地を変える必要が出てくるかもしれないと悲嘆に暮れていた。

III. 世帯調査をする

私は悶々とした日々を過ごしていた。しかし、住込みフィールドワークはまだ始まったばかりだった。しばらくすると、私は、世帯調査を今よりもスムーズに進められるようになんとか工夫をしてみよう、と考えるに至った。それでもだめなら調査地の変更を検討してみよう、と自分に言い聞かせた。

1. 世帯調査の進め方

まずは、シャリフ一家の人々に、私が一人で世帯調査に出かけることを理解してもらわなくてはいけなかった。私は、シャリフさんやイルハムに、博士論文を書くために集落の全世帯を訪ねて話を聞かねばならないこと、ハフィザやサルタナは家の仕事で忙しく、また、彼女たちの他には付き添ってくれる人がいないことを挙げて、自分一人で世帯調査を進める必要があることを、つたないウズベク語をフル動員してできるだけ丁寧に説明した。

しばらくすると、一家の人々に心配を掛けないコツが見えてきた。私は、世帯調査に出かける前に、シャリフさんに「今日はどの家に行けばよいか、そこの家族はどんな人たちか」という質問をするようになった。シャリフさんは集落の人々のことを熟知していた。とても親切にアドバイスをくれたし、私の行先を把握できて安心しているようだった。夕食時には、一家の人々が「今日は誰々の家に行ったのか、そこでどんな話をしたのか」と聞いてくれるようになった。このやりとりは、一家の人々が私の活動を知り安心するだけでなく、私の集落の人々に対する理解を深めることにつながった。

世帯調査自体はというと、犬に威嚇されて非常に怖い思いをすることはあったが、その他は大きな問題なく順調に進んだ。以下は世帯調査でしていた質問である。

- ・世帯主と世帯構成員の情報（生年月日、性別、職業、学歴）
- ・農地の所有状況（所有の有無、所有面積、栽培作物、栽培目的）
- ・家畜の所有状況（所有の有無、家畜の種類と頭数、飼育目的）
- ・手工芸の生産状況（生産物の種類、誰が従事するのか）
- ・絨毯の生産状況（生産の有無、誰が従事するのか、生産目的、生産開始時期、生産枚数（年）、生産技法の習得場所、生産時期、絨毯の種類（材料、材料の入手場所、絨毯の大きさと形、文様の種類、使用する色、デザイン創作の有無、一枚の絨毯を織る人数、完成までの

日数)

私がウズベク語でこれらの質問をし、質問に対する答えを持参した質問票に書き込んでいく方式で進めた。世帯主（年長の男性であることが多い）が世帯構成員の情報や世帯の収入源について詳細に把握しているので、できるだけ世帯主に答えてもらうようにした。一世帯にかかる時間はまちまちで、前頁の質問に関するやりとりだけで他の話はせずにすぐに終わることもあれば、質問以外にも集落や家族に関するさまざまな話をしてくれたり、私自身が質問されたりして長居をしてしまうこともあった。

2. 世帯調査を通して分かったこと

集落には150世帯ほどがあり、私は144世帯を訪ねることができた。残りの6世帯については留守だったりして、結局世帯調査ができずに終わってしまった。この点は非常に反省している。ちなみに、144世帯を回るのにかけた期間は約5カ月にも及ぶ。質問票の日付を見ると、一世帯目（シャリフ一家）は5月の下旬、144世帯目は10月下旬に実施したことがわかる。さらに他の質問票の日付を見ていくと、7月中旬まではほとんど調査は進んでおらず、7月後半からコンスタントに世帯調査を実施していたことがわかる。住込みフィールドワークを始めて2カ月ほどは、なかなか世帯調査が進められず悶々と日々を過ごしていたということである。

色々反省点は多いのだが、144世帯を訪ねることで得られたことはたくさんある。私の関心は絨毯そのものや生産者に偏りがちだったが、世帯調査を通して、集落一帯の自然環境と生業の特徴、生計維持の傾向など、絨毯以外の重要な事柄について知ることができた。特に、自然環境と生業のつながりについて知ることができたのは大きな収穫だった。世帯調査をしなければよく知らないままだったと思う。以下、大まかに集落の生活を紹介しよう。

この集落の主な生業は牧畜である。多くの世帯では牛、羊、山羊などの家畜を飼育し、家畜の成長後にバザールで売る。牡牛は一頭6万円ほどで売れる。当時、5、6人の家族が1カ月で必要な現金は1万円強と言われていたので、この金額は非常に大きい。農作物はというと、集落では灌漑用水を利用して野菜や果物を栽培できる農地が限られていたこと、灌漑用水に頼ることができない農地では、天水で穀物（大麦、小麦、ひよこ豆など）栽培が行われていた。後者は、降水量によっては収穫がまったくできない年もあった。集落では、多くの世帯で農地を所有し作物を栽培していたが、収穫量の少なさや不安定さから主に自家消費用に栽培が行われていた。

生計の維持について、複数の収入源を確保するのが一般的だった。どのような収入源を確保するかは、世帯構成員の学歴、技能、人的ネットワークにより違いがあるが、主なものとして、タクシー運転手、日雇い労働（農作業や建築）、都市や外国（ロシアやカザフスタン）での出稼ぎ労働、絨毯織りや仕立て、学校教員、学校清掃人などだった。私が意外に感じたのは、現金収入源として退職者の年金や児童手当がしばしばあげられたことである。

絨毯を織る世帯では、年に2、3枚絨毯を織ることが多い。材料は自分の家で飼育する羊から採った毛や、バザールで購入した羊毛である。私にとって興味深かったのは、絨毯を織る目的で

ある。人々は自分の子供の結婚の持参財としたり⁴、部屋に敷くことを念頭に絨毯を織るようだったが、明確な目的は設定しないことが一般的だった。結婚の持参財として織った絨毯でも、持ち主がお金に困ればバザールで売ることがあった。完成した絨毯は、持ち主の都合によってさまざまな使われ方をするのである⁵。翻って、私は、何かを作る時には「何かに使うため」など明確な目的を設定してから作業にとりかかることが多い。「何かを作る（する）時は目的を設定するもの」という考えを無意識に受け入れていた私には、明確な目的がなくとも（あったとしても簡単に变化する）行われる絨毯生産は不思議で新鮮な活動だった。

前章で述べたように、住込みフィールドワーク開始直後は、世帯調査なんてできないのではないかとくじけそうになっていた。しかし、シャリフ一家の人々の理解を少しずつ得られたことや、集落の人々が突然の訪問にも関わらず私を受け入れてくれたことで、時間はかかってしまったが、集落のほとんどの世帯を訪問することができた。そして、世帯調査を通して集落の生活全般に対する理解を深められたことで、次章で紹介するバザールでのフィールドワークは刺激に満ちたものとなった。

IV. バザールの活気に触れる

集落から5キロほど離れた場所では、毎週木曜日にバザール (bozor) が開催される。木曜日の夜明け前には、シャリフさんの家の前の道路を商品や家畜をバザールに運ぶ車が盛んに通る。夜明け前なのに徒歩でバザールへ向かう人の姿もある。バザールの日の朝に集落に漂う独特な雰囲気といったらない。

一帯の各集落には小規模な商店はあるが、スーパーマーケットのような大規模な常設店はない。バザールは、人々にとって生活物資購入の場であり、自家生産物（家畜、絨毯、乳製品、野菜など）を売り収入を得る場でもあるという、生活に欠かせない社会インフラであった。面白いのは、バザールの日には、バザールと集落を結ぶタクシーやバスが頻発するので、人々はバザールに集い結婚式や割礼儀礼の日程を知人に知らせたり、若者がお見合いをしたりと、様々な交流をしていたことである。

4 集落一帯において、絨毯は新郎新婦の両親が二人の新生活のために準備する生活用品の一つであった。2010年時点では、嫁側は最低4枚、婿側は最低6枚の絨毯を準備する必要があるといわれていた。

5 トルコ絨毯に関する人類学的研究を行った田村（2013）も、絨毯には「多元的な消費の位相」があることを指摘する。興味深いのは、他の手工芸研究では「多元的な消費の位相」については指摘されていない点である。なぜ、絨毯は「多元的な消費の位相」を持つのか。いつかきちんと考えてみたいテーマである。



写真3：チャル・木曜バザール(2012年)



写真4：絨毯バザール(木曜バザール)(2010年)

シャリフ一家では、息子のイルハムがバザールへ買い物に行く係だった。イルハムは、木曜バザールの他に集落から10キロほど離れた場所で開催される土曜バザールにも出かけていた。彼がバザールで買うのは、一週間分の食糧、衣類などその時必要な生活用品、自宅で外国人観光客に転売する絨毯などである。イルハムがバザールから帰宅すると、子供たちがイルハムの車に駆け寄ってくる。お菓子、果物、バザールでしか売っていない揚げ魚、甘くてん菜の煮込みを楽しみにしているのだ。バザールの日の食卓はいつもより豪華だ。果物やお菓子はあふれ、料理に入っている肉も多い。バザールの日は、いつもは長閑な集落が活気づく日である。

1. バザール訪問

私がバザールに本格的に出入りするようになったのは、世帯調査の終わりが見えてきた10月の初旬である。世帯調査をする中で、バザールに絨毯を売る一画があることを聞き、そこで絨毯を売る／買う理由を聞いたり、値段交渉を見学したりしようと思ったのである。ただ、当時の私の関心は絨毯の生産現場にあったので、絨毯の売買は概要を把握する程度でよいだろうと考えていた。ところが、当初の見込みに反して、私は絨毯バザールでのフィールドワークにはまっていた。以下は私のフィールドノートの抜粋である。

2010年10月14日（記入は18日）⁶

迫力のある顔をしたおじさんに「何のために、何枚くらい絨毯を買うのか」と尋ねたところ、この人は絨毯商人であった。なんでも、20枚くらい色々な種類の絨毯を買い、これらを主にスルハンダリヤ州の各町で売りさばっているのだという。大体、カティック絨毯⁷であれば、

6 フィールドノートは当日の夜や次の日の朝に書くことが多かったが、疲れていてノートを書かずに寝てしまい、翌日の朝もノートを書く時間が取れなかった時などは、後日遡って書くこともあった。また、書き忘れたことを後日追加的に書いたりしたので、出来事があった日と記入日がずれることがあった。

7 集落周辺で生産されている絨毯の種類の名前。

4万5千スムくらいで仕入れたものは、5万5千スム、6万スムほどで売れるのだという。

なるほど、絨毯織りの盛んでない地域は、もっぱら機械織り絨毯を買い求めるのかと思っていたが、こうして手織り絨毯も流通しているのだろう。

買い手はどういう人なのだろう。手織り絨毯を買う理由は？機械織り絨毯よりも安いから？それとも…？

私は、世帯調査中に、集落の人が時々絨毯をバザールで売っていることを知った。そして「集落の多くの世帯で絨毯を生産しているのに、なぜ絨毯はバザールで売れるのだろうか」という素朴な疑問を持った。とはいえ、集落一帯において絨毯は生活必需品である⁸。何かの必要に迫られて買う人が一定数いるのだろう、と勝手に考えていた。上のフィールドノートの抜粋は、この思い込みがよい意味で裏切られたことを示している。当時のウズベキスタンでは、手織り絨毯の生産地を除くと、都市部から離れた村落部でも機械織り絨毯がかなり普及していた。こういう状況の中で、生産地ではない場所で手織りの絨毯が流通しているのは興味深いことだった。私は、しばらくの間絨毯バザールに通い、商売の様子を観察したり、売り手や買い手から話を聞いたりしなければならなかったと思った。

2. バザールでのフィールドワーク

私が出入りしていたのは、木曜バザール、土曜バザール、チャル・木曜バザール（日曜開催）の三つのバザールである。木曜バザールはシャリフさんの家から5キロほど、土曜バザールは10キロほど離れたところで開催される。チャル・木曜バザールは、タクシーを乗り継いで1～2時間ほどのところにあるバザールである。

木曜、土曜バザールにはイルハムが毎週買い物に行くので、私は彼の車に同乗して行くことが多かった。イルハムは絨毯バザールの顔なじみである。彼はバザールでよい絨毯を見つけては購入し、自宅で外国人観光客に売る。イルハムが私を「ウズベキスタンの絨毯について勉強している日本から来た大学院生」と紹介してくれたことで、絨毯バザールの常連客の私に対する怪しみのまなざしはずいぶん軽減された（ように私は感じた）。私は、絨毯バザールに行ったら、売り手と買い手に「なぜ絨毯を売る／買うのか」尋ねて回った。私の行動は相当に怪しかったと思うが、多くの方は突撃インタビューに答えてくれた。とてもありがたいことである。

絨毯バザールでのフィールドワークが楽しく順調に進んだのは、イルハムが橋渡しをしてくれたことが大きい。ただ、これは私の印象にすぎないのだが、バザールの人々（多くはバザール周辺に住む人）が、集落にいるときよりもオープンな心で接してくれたことも、バザールでのフィールドワークが充実した大きな理由の一つではないかと思っている。集落や自宅にいるとき、人々は家事や家畜の世話など色々な仕事を抱えている。世帯調査で出会った人々は総じて親切だったのだが、仕事の合間を縫って私の調査に付き合ってくれていた。他方、バザールでは、

8 住居の床は板張りになっておらず、土やコンクリートがむき出しになっていることが多い。絨毯は土埃や地面からの冷気を抑えるので、住居の床には絨毯が敷き詰められていた。

特に売り手は買い手が来なければ何もすることがない。こんな時に話しかけてくる私は、彼／彼女たちにとって、たとえ怪しくとも暇つぶしをするのにはよい存在だったのかもしれない。

しばらくバザールに出入りしていると、色々なことがわかってきた。毎週のように木曜バザールと土曜バザールに来る人が何人もいたのである。彼らは売買人で、バザールで絨毯を複数枚買付け、農耕が盛んな地域で転売していた。彼ら曰く、農耕が盛んな地域では女性たちは農作業に時間を取られるので、絨毯をあまり織らないという。絨毯バザールにいる売り手は誰かという、売買人ではなくバザールの周辺に住む人が多いことがわかった。彼／彼女たちの多くは、家で保管している絨毯を持ってきて売っていた。絨毯を売る理由を聞いてみると、結婚式などの儀礼への参加費用、家族の医療費の捻出、年金など定期的な現金収入の支払い遅延に対処するためだという。売り手は、突発的な現金不足を補うために絨毯を売る傾向にあることがわかった。

集落の人々の「絨毯を織るとき明確な目的は持たない」「織った絨毯はひとまず長持の上に置いておく」といった「とりあえず絨毯を織っておく」姿勢に対して、私は興味深いと感じながらも釈然としない思いを抱いていた。この疑問の一部が、絨毯バザールでのフィールドワークを通して解けた。絨毯は、牧畜地域で生産されその一部は農耕地域に流通する。牧畜地域の人々にとっては、絨毯はバザールで売ることができる商品という側面を持っている。だから、集落の人々は将来物入りになることを見越して「とりあえず絨毯を織っておく」のである。世帯調査での気付きとバザールでのフィールドワークがつながり、ローカルな絨毯の価値がいかに成り立っているのが具体的に見えてきた瞬間だった。これは、私の住込みフィールドワークのハイライトの一つである⁹。

V. 住込みフィールドワークのその後

賑やかで開放的なバザールでフィールドワークができたことは、私にとって幸運なことだったと思っている。バザールにおける売買の作法や、売買を通して形成される社会関係の探求は、現在でも私の重要な研究テーマの一つだからである。

バザールでのフィールドワークは刺激的で楽しいものだったが、住込みフィールドワーク全体が順調に進んだかという、まったくそうではない。シャリフ一家の人々が私の住込みフィールドワークの目的を理解してくれたこと、集落の人々が私の存在に多少慣れてくれたことで、私

9 帰国したのは2011年の11月だった。合計22カ月のウズベキスタン留学だった。帰国後、私は、まずはバザールでの絨毯売買に関する論文をまとめようと決めたのだが、バザールは住込みフィールドワーク中に出会ったテーマだったので、これまでバザールについてどのような研究が発表され、その中でどのような議論がされてきたのかについて一から勉強する必要があった。田村(2009)のトルコの定期市に関する研究を手掛かりとして、ギアーツ(Geertz 1979)のモロッコのスークに関する研究などを読んだ。そして、私がバザールで見聞きしたことは、先行研究と比較してどのような独自性があるのかを考え続けた。今振り返って良かったと思うのは、データ整理の段階から論文投稿の直後にかけて、学会や研究会で発表の機会を複数回得られたことである。つたない研究発表を通して、多くの人からデータの整理と提示の仕方、議論の方向性に関するアドバイスを貰うことができた。時には厳しい意見もあったが、論文としてまとめる際のよい肥やしとなった。感謝している。バザールでのフィールドワークの成果は、宗野(2014)として発表することができた。

は、世帯調査やバザールでのフィールドワークのために外出はできるようになった。しかし結局のところ、私はシャリフさんの家に住み込んでいる間、外出のしづらさを感じ続けた。集落の人々の（特に既婚女性の）「女性は家にいて家事をすべきである」という発言や、外出が好きな女性に対する批判的なまなざしに（それらは私に向けられたものではなかったのだが）遭遇するたびに、外出のしづらさを再確認していたからなのかもしれない。世帯調査がひと段落したあとは、私は集落内を歩き回ることにはせずに、シャリフさんの兄弟／姉妹世帯や息子／娘世帯など、シャリフ一家と日常的に交流の多い人々と付き合うようになった。

その代わりに、矛盾するようだが、私は別の集落や都市に足を延ばしてフィールドワークをするようになった。バザールで知り合った絨毯の売買人を頼りに、別集落でも絨毯生産についてフィールドワークをはじめた。色々な人から話を聞くうちに、集落によって生産される絨毯の種類や模様に違いがあることがわかり、違いが生じる理由を調べてみようと思ったのである。また、都市部と村落部では手工芸生産の歴史や現状が異なることもわかってきた。カシュカダリヤ州北部の中心都市シャフリサブズで、ソ連時代の手工芸生産の変遷や、ウズベキスタン独立後に外国人観光客向けに手工芸を生産する人を対象にフィールドワークをするようになった。さまざまなか所でフィールドワークをするようになったのは、これらのテーマが興味深かったこともあるが、やりづらさを感じながら集落内を一人で歩き回るよりも、シャリフさんの家を拠点として、別の集落や都市でフィールドワークをする方が気持ちが楽だったということもある。

住込みフィールドワークを開始した当初、私は一つの集落の生活に深く入り込んだ調査をしようと思っていた。ところが、実際にフィールドワークを始めてみると、女性の行動規範が存在していること、これに接して私自身も集落内を歩き回ることにはためらいを感じたことから、シャリフ一家とその血縁者以外の人々との親交は思ったほど深まらなかった。私は、自分が研究者（の卵）であることを表明して、女性に対する行動規範を気にせずに集落内を興味関心の赴くままに調査することも、集落の人々が共有する「女性は家にいて家事をすべきである」という価値観を受け入れ、集落の女性たちと行動を共にすることもできなかった。自分がどのような立場を取ればよいか悩みフラフラとしているうちに、一年が過ぎてしまったという感じがする。とはいえ「日本から来たシャリフさんの娘」として生活したことは、フィールドワークの足かせにばかりなっていたわけではない。助けられたことはたくさんあった。集落の人々にとっては、どこの馬の骨ともわからない日本人よりも、シャリフ一家と関わりの深い日本人の方が、私と接する際に、自分がどのように振舞えばよいのかをイメージしやすかったと思うからである。私にとっては、多少の窮屈さは感じつつも、集落で安心して生活できることにつながった。安心できる場所があるということは、長期のフィールドワークをする上でとても重要なことである。

VI. おわりに：住込みフィールドワークを振り返って

私の住込みフィールドワークは、予想外の展開と反省点に満ちている。バザールでのフィールドワークに目覚めるとは思っていなかったし、女性の外出に対して集落の人々が持つ忌避感に、

私は弱気になりすぎたかもしれない。しかし、この住込みフィールドワークで得られたことが、現在の私の研究の基盤になっていることは確かなので、不十分なものに終わってしまったという一言では片づけられない。バザールでのフィールドワークに関しては、想定外であったにもかかわらず、現在でも取り組めるテーマに出会えたことは、この上ない幸せだと思っている。女性の行動規範に悩んだことに関しては「日本から来たシャリフさんの娘」として集落で生活したことで、ウズベキスタンの女性をとりまく規範やジェンダー関係を、実体験に基づいて考える機会になったと今では思っている。ウズベキスタンのジェンダーや家族に関わる規範は何に基づくものなのか、これらは近年どのように変化しているのかという問題は、私の研究テーマの一つになっているのだから、住込みフィールドワーク中に、この問題にずいぶん悩んだことも無駄にはなっていない。

ところで、私は現在、大学の長期休暇期間などを利用して、1週間から1カ月弱のフィールドワークを断続的に行っている。短期間のフィールドワークだと、集めるべき情報を決められた期間内に得ることに苦心してしまう。そうすると、思ってもみなかった面白いことや、人との出会いを逃してしまうこともある。時には、人との関係づくりや維持がおろそかになってしまうこともある。このような状況の中で、改めて10年前の住込みフィールドワークを振り返ってみると、バザールの開放感や賑わいに強く惹かれたのは、「シャリフさんの娘」として、静かで平和だが少し窮屈な集落で生活していたからこそなのだろう。「ああすればよかった、こうすればよかった」とモヤモヤ感が残る住込みフィールドワークではあったが（楽しかったことも、もちろんたくさんある）、一年間集落の生活に浸かっていたからこそ出会えたテーマ、人、できたことがあったと気づくのである。

参考文献

- 宗野ふもと 2014「ウズベキスタンにおけるバザールと生計戦略—カシュカダリヤ州北部、手織り物売買の事例から—」『文化人類学』79 (1), 1-24頁。
- 田村うらら 2009「トルコの定期市における売り手-買い手関係—顧客関係の固定化をめぐる—」『文化人類学』74 (1), 48-71頁。
- 2013『トルコ絨毯が織りなす社会生活—グローバルに流通するモノをめぐる民族誌—』世界思想社。
- 中谷文美 2003『女の仕事のエスノグラフィー—バリ島の布・儀礼・ジェンダー—』世界思想社。
- Geertz, Clifford. 1979 "Suq: the Bazaar Economy in Sefrou", *In Meaning and Order in Moroccan Society-Three Essays in Cultural Analysis*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 123-235.